開き不良

うつる自分のかげをめがけて、とびついて來ます。鏡の中のをんどりも、首の毛をさか立てて ゐます。

「おや、自分のかげを、ほかの をんどりと思って ゐるのだな。」

と、勇さんは、想ひました。

をんどりは、力いっぱい 鏡を くちばしでつつきます。

たいへんな けんくわになりました。

勇さんは、かはいさうになって、鏡を ひっこめました。すると、をんどりは、元氣よく羽ばたきをしながら、

「こけこっこう。」

と 聲高く 歌ひました。

よみかた三 第二學年前期用（第二分冊）

昭和二十一年四月二十三日 翻刻印刷
昭和二十一年五月十五日 翻刻發行
（昭和二十一年四月二十三日文部省檢定濟）

よみかた三 第二學年前期用（第二分冊）
定價 金參拾五錢

著作兼發行者 文部省
著作權所有

翻刻發行兼印刷者 東京都王子區堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式會社
代表者 井上源之丞

印刷所 東京都王子區堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式會社

Approved by Ministry of Education (Date Apr. 23. 1946)

發行所 東京書籍株式會社





## 二十三 乘合自動車

きのふ 乘合自動車に 乘って、ホ町の をばさんの ところへ 行きました。松並木を 通りぬけると、たんぼでは、稻を さかんに かり取って ゐました。

しばらく 行くと、牛の 引いて ゐる 車を おひこしました。サ村の 入口で、ルックサックを せおった 中學校の 生徒さんが、二人 乘りこみました。

道が だんだん のぼりに なって、自動車は 大きな 音を たてて、ぐんぐん のぼりました。

雨が はから さし出た 木の 枝が、まどに とどきさうでした。黄色や、赤い 木の 葉で、車の 中が 明かるいほどでした。

たうげに 來た 時、生徒さんが、

「海が 見える。」

と 大きな こゑで いひました。山と 山との 間に、海が 光って ゐました。

たうげを おりた ところで、また 止りました。そこで 女の 子が 二人 乘りました。外では、その 友だちが 四人 並んで、「さやうなら、さやうなら。」と いって、手を ふりました。

川へ 來ました。橋を わたらうと すると、向かふから も 乘合自動車が 來ました。めいめい 左へ よって、すれすれに 通りました。うんてんしゅさんが おたがひに 手を あげて、元氣よく あいさつを しました。

ホ町に 近い ところで、どこかの おばあさんが 乘りました。私が わきへ よって 席を あけると、おばあさんは 腰を かけながら、

「ありがたう、ぼっちゃんは どこまで。」

とたづねました。
「ホ町の　をばさんの　ところへ　行くの　です。」
と答へますと、
「さう　ですか、わたしも　ホ町まで　行きます　よ。」
といひました。
道の　まん中で、にはとりが　たくさん　ゐさを　ひろって　ゐましたので、うんてんしゅさんが、「ブウブウ。」と、ラッパを　ならしました。にはとりは、おどろいて　右と　左へ　逃げました。
まもなく　ホ町に　はいって、いうびんきょくの　前で　止りました。をばさんの　うちの　三郎さんが、私の　おりるのを　見つけて、笑ひながら　走って　來ました。

## 二十四　かけっこ

一年生の　旗取が　すんで、いよいよ　ぼくたちの　かけっこに　なりました。
ぼくたち　七人は、白い　線に　そって　並びました。
「用意。」
と　先生の　聲。
「どん。」
聞くが　早いか、かけだしました。
そのうちに、二人が　ぼくを　追ひこしました。
「負ける　ものか。」
ぼくは　一生けんめいに　走りました。
「早く、早く。」
「しっかり。」



おうゑんの　聲も、ごちゃごちゃに　なって　聞えます。
もう　何も　見えません。ぼくは　む中で　走りました。すると、何かに　つまづいて　ころびました。
「しまった。」
と　思ひながら、すぐ　はね起きました。が、もう　みんなから、すっかり　おくれて　ゐました。
「よさうか。」
と　思ひました。しかし、おとうさんが、「負けてもよいから、しまひまで　走れ。」と、おっしゃったのを　思ひ出して、また　一生けんめいに　走りました。
「わあ。」
と　手を　たたいて、笑って　ゐる　ものも　あるやうでした。きまりが　わるいと　思ひながら、ぼくは　おしまひまで　走りつづけました。すると、先生が　にこにこして、
「太郎くん、えらいぞ。ころんでも、よくしまひまで　走った。かんじん、かんしん。」
と　いって、ほめて　くださいました。

## 二十五　たぬきの　腹つづみ

「さあ　さあ、集れ、月が　出た。
みんなで　つづみの　打ちくらだ。」
お山の　上では　親だぬき、
ぽんぽこ　あひづの　腹つづみ。
やぶの　かげから　木かげから、
ぬっくり　ぬっくり、子だぬきが、
出て　來て　お山へ　集って、
ずらりと　並んで　わに　なった。

空には まるい お月さま、
ぽっかり 浮かんだ 白い 雲。
月に うかれて 腹つづみ、
ぽんぽこ ぽんぽこ 打ちだした。

## 二十六　滿洲の 冬

寒さの ために、まどガラス 一めん、まっ白に こほったのは きれいな もの です。この氷の もやうは、どれ 一つとして 同じ ものが ありません。人が かいても、こんなに きれいには かけない でせう。

白い 菊の 花が、咲きそろっ だやうなのも あります。

白くじゃくが、羽を いっぱいに ひろげたやうなのも あります。

星が 並んで、光って みるやうなのも あります。

子どもたちは、この 氷の 上に、指で 字を 書いたり、人の 顔を かいたりして 遊びます。

畫に なると、いつのまにか、ガラスの 氷も すっかり 消えますが、次の 朝には、また 新しい ちがった もやうが、美しく あらはれます。

ガラスの 氷も きれい ですが、じゅ氷といふのは もっと きれい です。これは、木の 枝と いふ 枝が、すっかり 氷に 包まれて しまふ のです。ちゃうど 水しゃうで 作った 木の やう です。

このじゅ氷に 朝日が さすと、きらきらと 光って、みごとな もの です。風が 吹いて來ると、木の 枝が ふれあって、からからと かはいらしい 音を たてます。



滿洲の 子どもたちは、いくら 寒くても、元氣よく スケートを します。

さいしょは、スケートを つけて 氷の 上に立つ ことも、なかなか むづかしいの ですが、そのうちに 一メートル、五メートル、二十メートルと、だんだん うまく すべれるやうになるの です。のちには、すべりながら まがったり、後向きに すべったり、友だちと 手を つなぎあったりして、思ふままに すべります。かう なると、おもしろくて おもしろくて たまりません。

寒ければ 寒いほど、子どもたちは 喜びます。それは、寒いほど、スケート場の 氷が かちかちに なって、すべりよく なるから です。

また 子どもたちは、木で こしらへた こまを、氷の 上で まはして 遊びます。細い 棒の 先に ひもを つけて、そのひもで こまの腹を たたきます。すると、こまは 勢よく ぐんぐん まはります。ほっぺたを つめたい 風に 赤くしながら、む中に なって まはします。

## 二十七　白 兎

白兎が、島から 向かふの 陸へ 行って みたいと 思ひました。

ある日、はまべへ 出て 見ると、わにざめが ゐましたので、これは よいと 思って、

「きみの 仲間と ぼくの 仲間と、どっちが 多いか、くらべて みようでは ないか。」

といひました。わにざめは、

「それは おもしろからう。」

といって、すぐに 仲間を 大勢 つれて 來ま

した。白兎は、それを見て、

「きみの仲間は、ずゐぶん多いな。ぼくらの方が負けるかもしれない。ぼくが、きみらのせなかの上を、かぞへながらとんで行くから、向かふの陸まで並んでみたまへ。」

といひました。

わにざめは、白兎のいふとほりに並びました。白兎は、「一つ、二つ、三つ、四つ。」とかぞへながら、渡って行きました。もう一足で陸へあがらうといふ時、白兎は、

「きみらはうまくだまされたな。ぼくはここへ渡って來たかったのだ。あははは。」

といって、笑ひました。

わにざめはそれを聞くと、たいそうおこりました。おしまひにゐたわにざめが、白兎をつかまへて、からだの毛をみんなむしり取ってしまひました。

白兎は痛くてたまりません、はまべでしくしく泣いてゐました。その時、大勢の神様がお通りになって、

「おまへ、なぜ泣いてゐるのか。」

とおたづねになりました。白兎が今までのことを申しますと、神様は、

「それなら、海の水をあびて、ねてゐるがよい。」

とおっしゃいました。

白兎はすぐ海の水をあびました。すると、痛みがいっそうひどくなって、どうにもたまらなくなりました。

そこへ、大國主神といふ神様がおいでになりました。この、かたは、さきほどお通りになった神様がたの弟さんです。兄様がたの重いふくろをせおっていらっしゃったので、おそくおなりになったのです。

この大國主神も、

「おまへ、なぜ泣いてゐるのか。」

とおたづねになりました。白兎は泣きながら、また今までのことを申しました。大國主神は、

「かはいさうに。早く川の水でからだを洗って、がまのほをしいて、その上にころがるがよい。」

とおっしゃいました。

白兎がそのとほりにしますと、からだは、すぐもとのやうになりました。喜んで大國主神に、

「おかげですっかりなほりました。あなたは、おなさけ深いおかたですから、今は重いふくろをせおっていらっしゃっても、のちにはきっとおしあはせにおなりでせう。」

と申しました。

## 二十八　北風と南風

北風と南風は、たいそう仲がわるいやうです。冬の間は、寒い北風が、びゅうびゅうと吹きまはって、雪やあられを降らせたり、水をこほらせたりします。

しかし、北風が少しゆだんをしてゐると、暖い南風が、そっとやって來ます。さうして、北風の作った雪の山や、氷の池を、少しでもとかさうとします。すると、北風は、すぐ南風を追ひはらひます。

こんなことを、何べんもくりかへしてゐるうちに、冬が終に近づきます。今までは、うとうと眠って、弱い光を出してゐたお日樣が、目をさまして、暖い光を送るやうになります。

かうなって來ると、南風は、もう前のやうに負けてばかりはゐません。

「北風、おまへは、もう北の國へかへってしまへ。」

と、南風がいひます。すると、北風は、

「なあに、まだおまへの出て來る時ではない。わたしは、もう一度おまへを追ひはらって、野や山をまっ白にしてやる。」

と答へます。さうして、ありったけの力を出して、南風を追ひたてます。野や山が、また、雪でまっ白になります。

しかし、南風は、すぐに元氣をとりかへします。南の國から、大勢の仲間をつれて來て、北風をどしどしと追ひまくります。雪でも氷でも、かたはしからとかして、野や山を暖くします。暖い雨を、何べんか降らせます。すると、草や木が、だんだんと芽をふき、花のつぼみがふくらんで來ます。

南風はいひます。

「北風が、雪や氷で、野山をまっ白にした代りに、わたしは、赤い花や、みどりの若草で、野山をかざって見せよう。」

## 二十九　羽衣

白いはまべの
松原に、
波がよったり、
かへったり。



かもめすいすい
とんで行く、
空にかすんだ
富士の山。

一人の漁夫が、みほの松原へ出て來ます。

漁夫「今日は、よいお天氣だ。なんとまあ、よいけしきだらう。」

けしきに見とれながら歩いてゐますと、どこからか、よいにほひがして來ます。見ると、向かふの松の枝に、きれいな物がかかってゐます。

漁夫「あれは何だらう。」

漁夫は、そばへよってよく見ます。

漁夫「着物だな。こんなきれいな着物は、見たことがない。持ってかへって、うちのたからにしよう。」

漁夫は、その着物を取って、持って行かうとします。

松の木の後から、一人の女が出て來ます。

女「もし、それは私の着物でございますが、どうなさるのでございますか。」

漁夫「いや、これは私が拾ったのです。持ってかへって、うちのたからにしようと思ひます。」

女「それは、天人の羽衣と申しまして、あなたがたにはご用のない物でございます。どうぞ、お返しくださいませ。」

漁夫「天人の羽衣なら、なほさらお返しはできません。この國のたからにいたします。」

天人「それがないと、天へかへることができません。どうぞ、お返しくださいませ。」

漁夫「いや、返されません。」

天人は、悲しさうな顔をして、じっと空を見あげます。天人のしをれたやうすを見て、

漁夫「おきのどくですから、羽衣をお返しいたしませう。」

天人「それは、ありがたうございます。では、こちらへいただきませう。」

漁夫「お待ちください。天人のまひを、まって見せていただけませんか。」

天人「それでは、お禮にまひませう。でも、その羽衣がないと、まふことができません。」

漁夫「といって、羽衣をお返ししたら、あなたは、まはずにかへっておしまひになるでせう。」

天人「天人は、うそといふものを知りません。」

漁夫「ああ、これは、はづかしいことを申しました。」

漁夫は羽衣を返します。天人は、それを着て、靜かにまひます。

天人「月の都の天人たちは、
みんなそろってまひ上手。
黒い衣のそろひてまふと、
月はまつ黒やみの夜。
白い衣のそろひてまふと、
月は十五夜まんまるい。」

天人は、まひながら、だんだん天へのぼって行きます。

右に、左に
ひらひらと、
ゆれるたもとが



美しい。

白いはまべの
松原に、
波がよったり、
かへったり。

いつのまにやら
天人は、
春のかすみに
つつまれて、

めすいすい
て行く、
んのり
の山。

1953 1 2 紐入

昭和二十一年七月二十九日　翻刻印刷
昭和二十一年九月一五日　翻刻發行
〔昭和二十一年七月二十九日文部省檢定濟〕

よみがえる　第二分冊
定價金貳拾五錢

著作權所有者　文部省

Approved by Ministry of Education
(Date July 29, 1945.)

翻刻發行兼印刷者　東京都小石川區久堅町一〇八番地
日本書籍株式會社
代表者　木村淵之助

印刷所　東京都小石川區久堅町一〇八番地
日本書籍株式會社

發行所　東京都小石川區久堅町一〇八番地
日本書籍株式會社